寛永諸家譜

清和源氏辛亡冊之内
義光流之内 小笠原

50

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (50)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

坂田
内山　山中
窪田　日比野
土井　高室
市川　五十嵐

寛永諸家系圖傳

清和源氏
義光流

辛六

坂
家綱小笠原氏ト流ヲ同ジ

信政

壱五郎
出國　三列

後ニ無錢九郎ト称ス

浅草文庫

清康君廣忠卿

東照大權現へ注ゝ申

清康君ハ御対数度の御陣ゝ毎度

軍功をゝげ申候ゝ鎗ゝ二ツ也

歌ゝ ゝ ゝ 清康君 血鎗九郎

ゝゝ ゝ ゝ

信定

元五ゝ

ちやれ九郎、生涯用ゝ

大權現へ注ゝ申

ゝ久ゝ御陣ゝ駿河の姉川ゝ藤小山

度ゝ働ゝ ゝ

天正十年甲州ゝ陣の時織田信ゝハ

木曽路ゝ甲州へおもむゝ

大權現ハ後河口ゝ御出陣のゝ

後刻ハ庵の城ゝ甲斐の穴山梅雪斎

迎の御つゝて信定ゝ梅雪ゝ

注ゝハゝ庵ゝ城へ志のびゝ

五万石城小もくまりて梅雪をかくし
勝れかるむしゝむ兵ゝもりて
大権現甲州へ御出を数とかく落居
せしめ給へ御出之の細梅雪とたゞ
さへたまへ時よ梅雪信宅よりかゝ
八信もゝ梅雪ゝ玉をたまゝ八ゝ自
小ゝ来地を信宅ゝ一つゝ尾しとやく
うくゝ先後別清水ゝおかゝ五十石
地をゝゝ又美濃もとゝゝ弱を

をゝ後ゝゝ地弱を本多中書忠勝而
重小ゝ兵をさ後ゝゝ地ゝ
大権現信宅が武略を感し後ゝ
別当我地左ゝ
毛二村をたまゝ
同十八年小田原陣の時
大権現命ゝ本多忠勝ゝ属して
市陣をゝもむ
関東御入国の後ゝ領地薬場小行

同十九年奥列陣の砲鉄炮頭と
なりて忠勝に属して内地に
住宅老後小忠勝死して本多出雲守
が居城上総国小田喜城に移て嘉
永弐年右衛門が長男八幡臺輪に
任す
安政元年十二年病死　年六十七

信吉

檜七郎　生母同前
台徳院殿へ御法名
天正十八年
台徳院殿後府小田原へ御供
信吉寸　文禄四年病死

忠尚

長五郎　生母同前
本多内記が娘
第九郎

一正

指七郎　生國同所

慶長二年

石濱院殿へめし出さるる先陣を致す

と雖領す

同五年　真田御陣ゝ

石濱院殿本領を賜はるべきの御上

洛ときこ道中迄を勤む大坂まで

本領を賜はるへ此時

一正御慶長として銀子を雖領す

同十九年大坂御陣の時　松平　毋後ち

組まる仕事す

元和元年大坂乱の時伏見ゝ

城御番小笠原　松平　毋後ち同

ゝく伏見ゝ在番す

ゝ此後

松軍家へ御入ゝ

寛永十九年御鉄炮頭ゝなる

信次

第九郎　生母不詳

寛永十四年後府より
大権現（信長）の子孫と聞きつゝ
中小つゝ出さる

同十六年小十人組となる
大坂再度の陣に軍功を勤む
のち
駿府（御）一つ筆を習ひ御書
を清ゝ
寛永九年四月七日
将軍家に命じ小十人組頭となる
鉤命により布衣を拝
同年十二月
孔さる
同十五年十二月十七日御鉄砲頭となる
家紋丸の内に二文字義

国立公文書館
National Archives of Japan

名取

中若八源見義朝ゝくらて名取
とのゝゝもの

猪名

源見行綱ハ
廣忠卿へ法ゝ
生田二列法名全図

右次

孫兵衛　生国同前　法名宗薫

寛永五年関ヶ原御陣の砌参

上野介村越茂助養子ゟ

大権現へ出さる

台徳院殿

将軍家へ法名参ら

右利

右坂孫七郎　生国武蔵

右坂ゟ孫ゟ母ゟ伯父右坂

三十郎

大権現へ法名参ら

法名金母衣ものとなる以前

幼少ゟ右坂と称ゟ後

台徳院殿

将軍家へ法名参ら

家紋九の図と杉皮葉

大坂

生國二列

次右衛門尉
柴田勝家に従ふ
大坂小〳〵一向宗蜂起のとき郡田
越前小〳〵討死す

●堂屋

清房

次郎兵衛尉 生母同家

天正十九年

白浦院殿へ召出され

将軍家へ御奉公

正房

作次右衛門 生母武蔵

寛永八年

白浦院殿へ召出され後

将軍家へ御奉公

家綱様御代

国立公文書館
National Archives of Japan

日向

初めハ新津

生國信州佐久郡

新津右京亮

上杉家ニ仕ヘ岩村田ニ於テ討死

右京亮　父と同所ニ討死年三十二

亲

日向玄亲妹　生母同家

幼かりて父母ともに祖母の家に住

なりし祖母八武田信玄の家人日向大和守

が母なり是ありて新津をつくめく

日向と称す新津の家紋本来松皮

菱なりと云ども信玄より割菱を日

向と名乗りてつくめく紋とす

享年十二年五月十四日八十七歳にて

死去　法名宗玄

政成

信次郎　生母甲斐

天正八年二月豆州戸倉の城主

松田新六郎と小泉左衛門佐合戦乃時

政成甲州より戸倉へおもむき新六

郎法いく先陣をみく鑓をの

八月望日敵こちら矢ごを射て政
成が働をたてゝ和に新たくりく
政成が働のやうすを注げ敵こと注ら
ゝす

同九年京月中ゝる武列鉢形の岩甲
列湯殿多伊城へこゝゝ城郭をうまへ
蜂起すゝ時小
東照大権現北條氏直次郎左衛門尉
当孫下野守を注のいさゝ時政成西人
北条属一先陣にすみゝ首一級う
ちとる

同年京月中ゝる甲列足坂小ゝ一揆蜂
起のとき長谷次郎左衛門尉当孫下野守
北条属一先陣にすゝむ

同年七月十ゝる信列おゝ城を作野
刑部当一揆をおこすと北当孫下野守
北条属一軍切ゝる

同年八月ゝる信列望月ゝ一揆の時

岩田左衛門佐多属―毛月の城を
攻戦―首一級討とる
同年九月信州岩村田子嶺田森岩尾
ゆゑ一揆蜂起のときに孫下野守海
にて敵二人うちとる
同年岩尾流摩川陣の時真田安房守
首級下野守自ら注ぐ先陣となる
同年九月
大権現へ出されさる岩ゆる政成が母―

甲州竹居村を注ぐ
同年十一月十二日
大権現を奉祭る神く
同十一年閏正月十日　鉤命ゆく
後別小〳〵原原甲州小おゆく竹居村
を奉領す
同十二年四月九日別当久左衛門陣の
ときに松平岩尾門佐多属―先陣よ
り首二級を切る

大権現御出陣のとき毎度供奉
寄合十九年
大権現より是程五十人政盛に仰付
元和四年
台徳院殿年月同心十騎と仰付たまふ

政次

為右衛門尉
元和元年二月初めて

大権現と奉号
同年正月廿四日初めて
台徳院殿へ出さる
寛永十年十一月廿
将軍家と奉号

家綱卿ハ松平義 後ニ割義寄服

国立公文書館
National Archives of Japan

岡山

京

左京　生田信列

右明

左京　生田貞秀

第四大藩ノ士吏康貞小屬寸康貞治人と

なり関東法陣の時吉明
東照大権現に召出され参詣し奉る後
台徳院殿に法名を奉る

永清

七兵衛　出羽守
實は安房三左衛門國重の子なり幼少
祖父左京が養子となる後吉明が子
なるにより永清と改名す

将軍家に召出され法名を
家紋松皮菱

国立公文書館
National Archives of Japan

貞次

安房二左衛門　生田甲斐

常葉弾河守範貞が末流後は安房を

称号す常葉は平氏なり

武田信虎信玄父子二流へ岩櫛大

炊助信利信利若年なるよりおのゝ信長と

謙信と合戦の時討死す

[illegible]

直[illegible]国の[illegible]中[illegible]

[illegible]

貞次

安房二左衛門　生田甲斐

常葉弾河守　武田信虎の末流後は安房と

称号す常葉氏なり

武田信虎信玄父子に従へ長坂大

炊助と共に信州[illegible]を攻落るまおのく信玄と

謙信と合戦の時討死す

貞國

三大藩

生国因幡

信濃新田義貞子にして上野新田
荒山曲輪をもつて芝軽大夫となる
天正十年甲州没落の後貞國信州
田切の地に住せり

國重

三大藩

生国上野

第田康貞没落の後上州小おかべ
大権現軍士となり新府城にうた
まつられ貞國第田右馬丞右衛門
尉にて忠功をとげ寺康貞治人の後
井伊家に仕へ慶安元年
寛文十八年江州彦根山におかべ病死

永清

七左衛門　生母上野

父の兄弟の八男

家督相続未養

国立公文書館
National Archives of Japan

系

山中

先祖代々甲州巨摩郡山中村ノ
居住ニ付山中ヲ称號ス

庶助

生玉甲斐

分次

下野

生玉同系同玉山中村ノ城主

武田信昌より信虎小法師

分秀

英雄　生國甲斐

武田信虎小法師

分信

義信　生國甲斐源氏城に住す

武田信玄小屬す

天正十八年九月以六十七歳にて死す

法名道心

分行

氏水　生國甲斐

武田信勝に法師勝頼没落の後

東照大權現甲州御入国の時　石出る

法人なり

天正十二年長久手合戦の時信雄

歌陣小かくに首二級を討とられ敵
二人をいけどる
同十九年奥列侍陣の時岩沢小
作小ちて永を以て高名を表す
寛永二年四月廿九日武列小おの氏寄清
四十九歳法名寄清

外童

与九郎　左京亮　生国同所

天正十九年
大猷殿を為し奉る
同年奥列侍陣小作業を後
台徳院殿
御軍家へ法人へ召まれ
寛永十二年十一月五日武列小死す
五十八歳

外政

与九郎　　生母同家

白河院殿

為軍家へ参り給へ者

元和七年十一月廿四日病死二十六歳

常義

与五兵衛　　生母後列

寛永七年六月

為軍家を奉一者

重之

源左衛門　　生母武蔵

元和八年

白河院殿

為軍家を奉給者

常義　家紋　丸の内小裏鏡

重之　家紋　松皮菱

国立公文書館
National Archives of Japan

正後

孫左衛門

武田信勝新法名意安

天正十年

栗原大膳殿甲州へ出張の時石出されし

蕨田

正成

源五郎　生国河内　清右衛門家安

大楠現

台徳院殿御法名

正次

彦左衛門

生国河内

台徳院殿

将軍家へ御法名

賞ハ横尾勘兵衛ノ子孫ニ正成御名ヲ

子ゝ寸横尾勘兵衛ハ生国甲州横尾宮内

法名道悦ノ子ナリ道悦ハ武田信玄ノ家

臣ナリ

家紋松皮菱

国立公文書館
National Archives of Japan

日野の郷

初ハ村井氏なり

忠次

生涯信列

村井大学

小笠原氏小法師小笠原没落の後

小泉安藤ちゑ小屋村井をつくりて

日野郷と号す是程大和となりて軍功

ゆゑ小ちゑ感状をさづく

越後国の人討死

忠安

大学　生母上列
小条安蔵ニ流罪ニ被落の
後酒井雅楽忠世ニ流人ニ列ニおカ
て病死

忠重

八条流

大膳亮
右近院敏
功軍家ニ流ニ流人ニそなへられ
家紋杏葉

国立公文書館
National Archives of Japan

今井

昌忠

民部

武田信玄に従ひ、

永禄四年九月川中島合戦の時討死

生年甲斐

昌吉

左右衛門

生年同断

武田信玄信頼父子法
天正十年
東照大権現甲州法入の時召出さる
[illegible]

昌安
九郎兵衛
大権現
白浦院殿

生母同家

将軍家と[illegible]
忠昌
八郎兵衛

家紋丸の内松皮菱

国立公文書館
National Archives of Japan

今井

四郎兼平が末流

兼負

[illegible]刑繁て家人と号す

法市　生田和泉

信長法人て拵別よおのく外地二て

二百石を給りし

兼久

第四　宗薫　生国不詳

父宗久生涯おもふ〳〵二千二百石のうち
千二百石秀吉へさしあげのこりの石を
秀吉より給りて秀吉薨して後法名
瑞竜院と称す　きもいり出家の者を
東照大権現の命により改宗し島津と忠恩を
へ瑞竜院のもとへ下向致す

時の五奉行和議して宗薫一人が仲中
なりと以へども三利前尾より市蔵を
勧引とする関が原市庫の時市行
ゆせ三百石を相伝ひて都合千
二百石を相伝す
大権現命を以て和泉河内代
官を勤む
大坂一乱のとき摂津国西成郡
茨山小芝村と宗薫一万石を和泉の堺を

まもり申候

大権現へ御なをし被成候事

大坂へ召えすかゝり家業吾父子大

坂ニ石こめ家財悉没收せられ

うへ大坂ゟのれ出申候

大権現の麾下ニ成ふまつり三ヶ所流

いたしとゝ以ゟ

大権現ニ成候ゟ大坂城内庫ゟ作事

菓蓬

平左衛門尉

台徳院殿

功軍家ゟ為一ヶ所

所地なるゝ御代代家業用ゝ

おゝせつけられ

生玉用ゝ

黄續

表右清水殿
為軍家を為ー其ー黄隆因ニ之
なるべく御代変不ル 仕舞ル

家紋の内ニ 桔扇

高宝

家沢

年寄

武田信虎より法名

生国甲斐 法名道鑑

久家

生国同家 法名智心

武田信玄婚姻父子法名

昌重

母長澤氏　生母同家

武田勝頼小法名

天正十年

東照大権現甲斐御入国の時父子共に

召出され番頭に成る後

台徳院殿

昌成

左ヱ門

台徳院殿

将軍家へ法名奉る

生母武藤

将軍家へ法名奉る

家紋　松皮菱

国立公文書館
National Archives of Japan

市川

出羽三河

清左衛門

廣忠卿ニ清左衛門事後

東照大権現ニ清左衛門事

寛文六年病死時ニ七十歳

儀次

清和院

大樹枝

白壺院殿

為軍家之法号

寛永十七年九月廿二日病死時之

六十歳　法名為号

生母後列

正次

若之御

生母武列

国立公文書館
National Archives of Japan

市川

●東

伯後守　生玉甲斐

初め代官屋敷代官

うけたり

東照大権現へ召されて

歳八十三にて病死

系

内膳正　生母同家

信濃守従五位下源合義の娘

諱紀

渡友

義唐　生母同家

天正十四年

大膳亮小笠原信濃守

小田原奥列国ケ原三万石余

信濃守

台徳院殿に従て大坂夏陣

陣に信濃守

功軍家に従てすれ

寛永十四年病死六十六歳

友昌

義尚公

寛永十年

将軍家ニ御対面

家綱 松平右近衛少将

市川

生田武義

定家

加賀

北條家より法名武列小山田大義村

三條村より出かゝ文孫左衛門より出ス

定吉二郎と領地す　法名道蓮

定信

第四　生母宮

小笠原氏改め清水家を立て二方家合戦

北条氏信奥寺氏羅より信玄へ加勢と

して毛馬出の寺を指さしこさく

三河に入りて義元に対して二方家まく

討死　浅井長政

定吉

孫右衛門尉　生母宮

父定信討死の後定吉幼かなりと雖

も小笠原氏羅に法名小田原義城と法

号む

定吉の大久保石見守に属し十七

年の日御代度を勤む

同十八年

台徳院殿へ出さし

将軍家にうるまく達人書

家紋丸の内に沢瀉

五十嵐

●戊政

少参衛

出雲下総

東照大権現

名古屋院殿

初軍家光卿

常廣

仁治門　生年二列
實ハ小笠原信濃守廣宗ナリ
寛永二年
右法院殿
将軍家ノ法華ノ師
同十七年三十五歳ニシテ病死法名清貞

廣宗

仁治門　生年武列
家綱相模守

宗

小笠原弘馬守　生年二列
大膳亮ト命ヲ受テ小笠原毋波守經長ノ屬
一ニテ法華ノ師　病死七十歳

高廣（たかひろ）

俗名

生年月日

寛永二年五十二歳ニテ病死

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan